

巡礼季節

緑の丘の線。

花粉で黄色くスれた糸織じノート。

国境の川に沿った赤い肌を一台のトラックが遠ざかるとき、

たかあく砂煙が巻きあがる

立ち眩み

これ以上、流転には耐えきれない

たしかに荷台から

痩せた男がはるか後方を見つめていた

ぼくにください

どうか その眼を

今日一日を清める一カケラの怒りを

一瞬のうちに雨をたぐる

うぶな呼吸を

これ以上

つぎの一言を発することはできない

ざらつく季節に

つぎの一字をしめらせる

熱い唾液を

震動がある まったく悪路はつづくのだ

どんなに生きて
どんなに果てたか ついに一瞥もくれず
メコンは容赦なく寝がえりをうつ

呼吸が、

ちぎれる

いつまでも、いつまでも、おちてこない土埃につつまれて
方向を失くしたまま突っ立っている

ずっと

苦い夢に
歩いていく

ナゼ歓声ハアガルノカ

きみは目をとじる
きみはかぐ 金属の刃先を、
ガソリンを、 鶏を炙ったいい匂いを、
きみはきく 細かなハサミを、 唸るエンジンを、 とおく
怒鳴る声
地上とはなにか

溶けない飴玉 あの一粒の死で
喉をつつかえたままのきみが
ベトナムの真っ青な空のした座っている
見開けば、鏡

ミントグリーンの扉にかかる古びた鏡には
生え、伸びることを止めないベトナムの男たちの毛髪にむかって
すばやくハサミを動かす、しかめ面
快晴

かすかに軽くなっていく

刃先のかさなるたび

かすかに軽くなっていく　それがきみにはわかる

地上に光る一すじの破片

分離していくものはみな、生命も、みな物質だ

それだけなのか